

学位被授与者氏名	芝田 麻衣子 (しばた まいこ)
論文題目	英国紅茶文化史とトーマス・リプトン
論文審査結果の要旨	<p>本論文は、人口に膾炙した「世界の紅茶王」としてのリプトン像を否定しているわけではない。それを認めたくて、この像が主として彼の後継者の尽力の産物であったとする。彼の第一の業績は、産地直送のベーコンや卵などを多数の支店を通じて安価で提供したことにより、その結果として、「国民食」としてのイングリッシュ・ブレックファーストを完成させたことにあると述べられる。産業革命を経て裕福な労働者階級にまで広がっていた紅茶を、貧困層向けに簡便なパッケージで大々的に売り出したことは、その延長に位置付けられよう。文化研究ではしばしば、ある事象の先駆性が重視されるが、リプトンはイングリッシュ・ブレックファーストやティーバッグを生み出したわけではない。しかしそれらを拡大し、定着させたのがリプトンだったというのが、本論文の重要な指摘である。本論文は、紅茶に着手する前と後のビジネスを連続したものと捉え、「紅茶のリプトン」像を相対化することにある程度成功している。</p> <p>他方、新たなリプトン像は提示されたのであろうか。彼ほどの著名人であれば、日記や書簡が残されているのが常である。しかしリプトンには個人文書が存在しない。散逸した経緯も明らかではない。このような研究しづらい人物を対象として、新たな像を描き出すことはそもそも可能なのか。本論文は次のように論じる。リプトンは貧困な消費者に寄り添い、従業者を手厚く保護した一方で、価格を高騰させる要因を極力排除しようとした。その結果、彼はビジネスを支える多くの存在に目をつぶってしまった。その代表が、現在の感覚では時給 300 円程度で紅茶の荷下ろしをする労働者である。リプトンのビジネスの全盛期は、彼らの存在に焦点が当たり、イギリスが福祉国家への第一歩を歩み始めた時期であった。リプトンは社会問題についてほとんど何も書き残していないが、本論文は結論として、彼が誠実な人柄であったがゆえに、やがて当時の現実と自らのビジネスの間に折り合いがつかなくなり、引退を選択した可能性がある」と述べている。彼は「誠実な紅茶王」であったとも評されている。</p> <p>リプトンの誠実さは本論文の多くの箇所指摘される一方、あつてしかるべき社会問題への言及が自伝にないことが強調される。この両者を結びつける本論文の結論は魅力的であるが、十分な根拠があるとは言えない。主に資料的な制約によるものとはいえ、本論文はそれを乗り越えようとしていない。従業員への手厚い保護は自伝と伝記研究から導かれるだけで、アクセスは困難であろうが、社内文書に関する記述はない。また、当時、低賃金労働者はいくつかの公的・私的な調査の対象となり、数多くの証言を残している。しかし本論文はリプトン自身の語りを聞いているものの、彼のおかげで紅茶にありつけた一方、彼のビジネスによって買い叩かれた労働者の肉声には耳を傾けていない。広範な資料に当たることで、リプトンの誠実さや「語りの不在」が何を意味するのか、より蓋然性の高い結論を導き出すことができたのではないか。</p> <p>あるいは、リプトンの時代には、大衆消費材を生産する企業の一部で、社内福祉の充実を図る「福祉企業家」と称される人びとが存在した。本論文でも少しだけ言及されている S・ラウントリや G・カドベリたちである。</p>

彼らは社会に対して積極的に発言しているが、リプトンとの違いはどこにあったのか。この分野は一次史料や先行研究が豊富にある。リプトンと似通った企業家との比較を行うことで、別の論点が提示される可能性があったと考えられなくもない。

本論文は、このような大きな課題を残しているが、その構想・論旨・結論ともに、修士論文として十分に評価に値するものである。

平成 31 年 2 月 21 日に、北九州市立大学北方キャンパス本館 E-302 教室において、審査委員全員出席のもとで最終試験を実施して学力を確認し、論文の説明を受け、質疑応答ののちに、全員一致で当該論文が修士(国際学)として十分な内容であると判定した。